# 第二弁明

ユスティノス
藤遥　制作

# 1〜5章　ウルビクスの裁き、悪霊のしわざ、神とキリストの呼び名

1:1 ローマの人々よ、つい先ごろ、あなたがたの都で、ウルビクスのもとで起きたことがあります。また、至る所で同じように、治める者たちが理に合わないことを行っています。こうしたことが、わたしを強いて、この言葉を書きまとめさせました。あなたがたのためです。あなたがたも、わたしたちと同じ人間であり、兄弟だからです。たとえ、高い位と思われているものの誉れのために、あなたがたがそれを知らず、望みもしないとしてもです。1:2 実際、至る所で、父や隣人、子や友、兄弟や夫や妻から、過ちを戒められる人がいます。ただし、次のことを信じるようになった人々は別です。不義な者やふしだらな者は、永遠の火で罰せられます。徳があり、キリストのように生きた者は、苦しみを知らずに神とともに暮らすことになります。キリスト者となった人々のことを言っているのです。そのほかの人は、かたくなで、快楽を好み、善へ向かおうとしないので、わたしたちを殺そうとします。邪悪な悪霊たちもまた、わたしたちを殺そうとたくらみます。悪霊たちはわたしたちを憎み、そのような裁判官たちを手下にして、自分たちに仕えさせているからです。その裁判官たちは、いわば悪霊にとりつかれた役人なのです。1:3 ウルビクスのもとで起きたことすべての原因も、あなたがたにわかるように、行われたことを述べます。

2:1 ある女が、ふしだらに暮らす夫と生活をともにしていました。以前は彼女自身もふしだらに暮らしていました。しかし、キリストの教えを知ると、彼女は身を慎むようになりました。そして、夫も同じように身を慎むよう、説き伏せようとしました。教えを語り聞かせ、慎みなく、正しい理性に従わずに生きる者には、永遠の火の罰が待っていると告げたのです。2:2 けれども夫は、同じ好色な行いにふけり続け、その行いによって妻の心を離れさせました。実際、夫は、自然の法にも正しさにも反して、あらゆる手で快楽の道を求めていました。妻は、そういう夫とこの先も床をともにするのは、神を敬わないことだと考えたのです。それで、結婚の絆から離れようと望みました。2:3 けれども身内の者たちが、夫もいつかは変わる望みがあるのだから、もう少しとどまるようにと勧め、しきりに頼みました。それで彼女は、自分に無理を強いて、とどまりました。ところが、夫はアレキサンデリヤへ行き、もっとひどいことをしているという知らせが届きました。そこで彼女は、離縁しました。結婚の絆にとどまって食卓と床をともにすれば、夫の不義と不敬虔の仲間になってしまいます。そうならないように、あなたがたの言う「レプディウム」を渡したのです。2:4 このご立派な夫は、本来なら喜ぶべきでした。彼女は以前、酒宴とあらゆる悪徳を楽しみ、召使いや雇い人たちと気ままにふるまっていました。しかし、そうした行いをやめ、夫にも同じことをやめてほしいと願っていたのですから。それなのに夫は、自分が望まないのに妻が去ったので、彼女を訴えて、キリスト者だと言い立てました。2:5 彼女は、皇帝である陛下に嘆願書を差し出しました。まず自分の身辺を整理することを許していただき、その整理を終えてから、訴えについて弁明したいと願ったのです。そして陛下は、それをお許しになりました。2:6 かつて彼女の夫であった男は、今はもう彼女に対して何も言えなかったので、プトレマイオスという人に矛先を向けました。プトレマイオスは彼女にキリスト者の教えを授けた教師で、ウルビクスが呼び出した人です。そのやり方は次のとおりです。2:7 男には、友人の百卒長がいました。プトレマイオスを鎖につないだのは、この百卒長です。男はこの百卒長を説き伏せて、プトレマイオスを捕らえ、ただ一つ、キリスト者であるかどうかだけを問いただすようにさせました。プトレマイオスは真実を愛する人で、欺いたり偽りを言ったりする心を持っていませんでした。それで、自分はキリスト者だと告白しました。すると百卒長は彼を鎖につなぎ、長いあいだ牢に入れて罰しました。2:8 最後に、この人はウルビクスの前に引き出されました。そのときも同じように、キリスト者であるかどうか、ただそれだけを取り調べられました。彼は、キリストから受けた教えによって、自分に良いところがあると知っていました。それで再び、神の徳の教えを告白しました。2:9

実際、何であれ否む人は、その事柄を悪いと判断して否むのです。あるいは、自分がそれにふさわしくなく、無縁だと知っていて、告白を避けるのです。そのどちらも、まことのキリスト者には当てはまりません。2:10 ウルビクスは、彼を刑場へ引いて行くように命じました。その場に、ルキオという人がいました。この人もキリスト者でした。ルキオは、このように理に合わない裁きがなされたのを見て、ウルビクスに言いました。「この人は、姦淫した者でも、不品行な者でも、人殺しでも、盗人でも、強盗でもない。何かの悪事を行ったと証明されたわけでもない。ただ、キリスト者という名を告白しているだけだ。そういう人を、どんな理由で罰したのか。2:11 ウルビクスよ、あなたの裁きは、敬虔帝にふさわしくない。カイザルの子である哲学者にも、聖なる元老院にもふさわしくない」ウルビクスはほかには何も答えず、ルキオにも言いました。「おまえもそういう者のようだな」2:12 ルキオが「まさにそうだ」と答えると、ウルビクスは彼もまた刑場へ引いて行くように命じました。ルキオは、感謝するとまで言いました。こうした悪い主人たちから解き放たれて、天の父であり王であるかたのもとへ行くのだと知っていたからです。さらに、三人目の人も進み出て、罰を受けるように宣告されました。

3:1 しかし、だれかがこう言うかもしれません。「それなら、おまえたちはみな自殺して、今すぐ神のもとへ行けばよい。われわれに面倒をかけるな」そう言われないように、わたしたちがなぜそうしないのかを述べましょう。また、取り調べを受けると、なぜ恐れずに告白するのかも述べましょう。3:2 わたしたちは、神が世界をむやみに造られたのではなく、人類のために造られたと教えられています。また、先に述べたとおり、神は、ご自分に備わるものに倣う者たちを喜ばれます。言葉であれ行いであれ、悪いことを好む者たちを、喜ばれません。3:3 ですから、もしわたしたちがみな自殺するなら、わたしたちのせいで、だれも生まれず、神の教えの弟子となる者もいなくなります。わたしたちに関するかぎり、人類さえいなくなるのです。そうするなら、わたしたち自身も、神のみこころに逆らって行うことになるのです。3:4 取り調べを受けても、わたしたちは否みません。自分に悪いところが何もないと知っているからです。また、すべてにおいて真実を語らないのは、神を敬わないことだと考えるからです。真実を語ることが神に喜ばれると、わたしたちは知っています。さらに、今、あなたがたを不当な先入観からも解き放とうと急いでいるからです。

4:1 また、だれかの心に、こんな考えが忍び込むかもしれません。神を助け手と告白しているのなら、わたしたちが言うとおりに不義な者たちに捕らえられ、刑罰を受けてはいないはずだ、と。この疑いも解きましょう。4:2 神は全世界を造り、地上のものを人に従わせられました。天の元素を、実りを育て、季節を移り変わらせるために整え、それらに神の法を定められました。これらもまた、明らかに人のために造られたのです。そして神は、人と天の下にあるものへの配慮を、それらを治めるようご自分が任じられた御使いたちにゆだねられました。4:3 しかし御使いたちは、この定めを破り、女たちと交わる誘惑に負けて、子らをもうけました。それが、悪霊と呼ばれているものです。さらに彼らは、その後、人類を自分たちの奴隷にしました。あるときは魔術の書物によって、あるときは自分たちが加える恐怖と刑罰によってです。またあるときは、いけにえと香と注ぎの供え物を教えることによってです。彼らは欲望の情念の奴隷となってから、これらのものを必要とするようになったのです。そして人々の間に、殺人、戦争、姦淫、ふしだらな行い、あらゆる悪徳の種をまきました。4:4 そのため、詩人たちや神話の語り手たちは、男や女や町や民に対する行いを書き記しました。けれども、それが御使いたちと、彼らから生まれた悪霊たちのしわざだとは知りませんでした。そして、そのしわざを、神そのもの、つまりゼウスと、その種から生まれたとされる子らに帰しました。また、ゼウスの兄弟と言われたポセイドンとプルトンの子らと、同じようにその子らから生まれた者たちにも帰したのです。4:5 実際、詩人たちは、御使いたちがめいめい自分と自分の子らに付けた名で、それぞれを呼んだのです。

5:1 しかし、すべてのものの父には、付けられた名がありません。このかたは生まれることのないかただからです。実際、何かの名で呼ばれる者には、その名を付けた、自分より年長の者がいます。「父」「神」「創造者」「主」「支配者」というのは名ではなく、その恵みのわざと働きから来た呼び名です。5:2 そのかたの子、ただ一人ほんとうの意味で子と呼ばれるかたは、ロゴスです。初めに神は、このかたによってすべてのものを造り、整えられました。そのとき、このかた

は、造られたものより先に神とともにおられ、神からお生まれになりました。このかたがキリストと呼ばれるのは、油注がれたからであり、神がこのかたによってすべてのものを整えられたからです。この名もまた、知られていない意味を含んでいます。「神」という呼び名も名ではなく、説き明かしがたい事柄について、人の本性に植えつけられた思いであるのと同じです。[53] 一方、「イエス」は、人の名でもあり救い主の名でもあって、その意味をも持っています。実際、先に述べたとおり、このかたは人となられました。父なる神のみこころに従い、信じる人々のため、また悪霊を滅ぼすためにお生まれになったのです。そのことは、今、あなたがたの目の前で起きていることからも、知ることができます。[54] 実際、全世界で、またあなたがたの都でも、悪霊にとりつかれた多くの人がいます。ほかのどの祈祷師にも、まじない師にも、魔術師にも、いやされなかった人々です。その人々を、わたしたちキリスト者の多くがいやしてきました。ポンテオ・ピラトのもとで十字架につけられたイエス・キリストの名によって、悪霊に命じたのです。今もいやしています。人にとりついている悪霊を無力にし、追い払っているのです。

# 6〜10章　世界が保たれる理由、運命と選び、クレスケンス、ソクラテスとキリスト

6:1 そのため神は、全世界を混乱させ、解き崩すことを、なお控えておられます。そうすれば、邪悪な御使いも悪霊も人間も、もういなくなるはずです。それでも控えておられるのは、キリスト者の種のためです。神は、この種が自然を保つもとになっていると知っておられるのです。6:2 もしそうでなければ、あなたがたも、もうこうしたことを行えず、邪悪な悪霊に操られることもできなかったでしょう。そうではなく、裁きの火が下って、すべてのものを容赦なく解き崩していたはずです。かつて洪水が、ただ一人の人とその家族のほかは、だれも残さなかったのと同じです。その人を、わたしたちはノアと呼び、あなたがたはデウカリオンと呼びます。この人から、再びこれほど多くの人々が生まれました。その中には、悪い者もいれば、優れた者もいます。6:3 実際、わたしたちは、世界が火で焼き尽くされることも、このようにして起こると言うのです。ストア派の人々のように、すべてのものが互いに移り変わるという理屈によってではありません。それは、きわめて恥ずべき考えであることが明らかです。また、人が行うことや身に受けることが、運命によって起こるとも言いません。そうではなく、一人一人が正しく行うか罪を犯すかは、その人の選びによるのです。また、ソクラテスやそれに似た優れた人々が迫害され、鎖につながれるのは、邪悪な悪霊の働きによるのです。サルダナパロスやエピクロスやそれに似た者たちが、豊かさと名声のうちに幸福であるように見えるのも、そのためです。6:4 ストア派の人々は、このことを悟らなかったので、すべては運命の必然によって起こると言い切りました。しかし神は、御使いの種族も人間の種族も、初めから、自分で選ぶ力を持つものとして造られました。ですから、彼らが自分の犯した過ちのために、永遠の火で刑罰を受けるのは、正しいことなのです。6:5 生じたものはすべて、悪徳も徳も受け入れることができます。それが、その本性です。実際、もし両方へ向かう力を持っていなかったなら、それらのどれ一つ、ほめられるものではなかったでしょう。6:6 至る所で、正しい理性に従って法を定め、哲学をした人々も、このことを示しています。これを行え、あれからは離れよ、と命じているからです。ストア派の哲学者たちも、倫理の教えでは、同じことを力強く重んじています。そのため、原理と、物体でないものについての教えでは、彼らが道を誤っていることが明らかになるのです。6:7 実際、彼らが、人の行うことは運命によって起こると言うとしましょう。あるいは、神は、変わり、移ろい、いつも同じものへ解けていくもののほかの何ものでもないと言うとしましょう。どちらにしても、彼らが滅びるものしかとらえていなかったことが明らかになります。また、神そのものが、部分を通しても全体を通しても、あらゆる悪徳のうちにあることになります。さもなければ、悪徳も徳も何もないことになるでしょう。それは、健全な考えにも、理性にも、知性にも、まったく反することです。

7:1 ストア派の教えに従う人々は、せめて倫理の教えでは、節度ある者となりました。ある点では、詩人たちもそうでした。人類のどの種族にも、ロゴスの種が生まれつき植えられているからです。そのために、彼らが憎まれ、殺されたことを、わたしたちは知っています。ヘラクレイトスについては、先に述べたとおりです。わたしたちの時代のムソニウスや、ほかの人々のことも、わたしたちは知っています。7:2 実際、先に示したとおり、悪霊たちはいつも、次のような人々がみな憎まれるように仕向けてきました。どんな形であれロゴスに従って生き、悪徳を避けようと努める人々です。種としてのロゴスの一部によってではなく、ロゴス全体、すなわちキリストを知り、見つめることによって生きる人々がいます。そうであれば、その人々がはるかに激しく憎まれるように悪霊たちが仕向けても、何も不思議ではありません。悪霊たちは、正体を暴かれているからです。この悪霊たちは、永遠の火に閉じ込められて、ふさわしい罰を受け、刑罰に服することになります。7:3 実際、悪霊たちが今すでに、イエス・キリストの名によって、人間に打ち負かされているなら、それは教えています。悪霊たちと、悪霊を祭る者たちとに、永遠の火の罰がやがて臨むことをです。7:4 実際、預言

者たちはみな、そのようになると前もって告げ知らせました。わたしたちの師イエスも、そうお教えになりました。

8:1 ですから、わたしも、いま述べた者たちのだれかのたくらみにかかり、足かせの木にはめられることを覚悟しています[1]。あるいは、少なくとも、騒ぎを愛し、大言を愛するクレスケンスによってです。実際、この男は、知を愛する者、つまり哲学者と呼ぶに値しません。わたしたちについて知りもしないことを、公然と証言して、わたしたちを非難しているからです。キリスト者が無神論者で、神を敬わない者であるかのように言うのです。惑わされている大勢の人々に気に入られ、喜ばれようとして、そうしているのです。8:2 実際、この男は、キリストの教えに触れもしないで、わたしたちを攻撃しているのかもしれません。それなら、まったくの悪人であり、無学な人々よりはるかに劣っています。無学な人々でも、知らないことについて論じたり、偽りの証言をしたりするのを、しばしば控えるものです。また、もし教えに触れたうえで攻撃しているのなら、その教えのうちにある偉大さを悟らなかったのです。あるいは、悟ったのに、自分もキリスト者だと疑われないように、こうしたことをしているのです。それなら、なおさら卑しい、まったくの悪人です。無学な人々の、理に合わない思い込みと恐れに負けているのですから。8:3 実際、あなたがたに知ってほしいのです。わたしはこの男に、そうしたことについていくつかの問いを出して尋ねました。そして、この男がほんとうに何も知らないことを知り、それを明らかにしました。わたしの言うことはほんとうです。もしその問答のやりとりがあなたがたに報告されていないなら、その証しに、あなたがたの前でもう一度問答をする用意もあります。それもまた、王にふさわしいわざでしょう。8:4 わたしの問いとこの男の答えを、あなたがたが知っているなら、明らかなはずです。この男は、わたしたちのことを何一つ知らないのです。あるいは、知ってはいても、聞いている人々をはばかって、ソクラテスのように語る勇気がないのです。それなら、先に述べたとおり、この男は知を愛する者ではなく、名声を愛する者であることが明らかになります。ソクラテスの言葉は愛するに値するのに、この男はそれさえ重んじないのです。『しかし、人を真理より重んじてはならない』という言葉です。8:5 しかし、キュニコス派の人は、善悪を区別しないことを目的に掲げています。そういう人には、区別しないことのほかに、善を知ることはできません。

9:1 哲学者と思われている人々は、こう言います。不義な者は永遠の火で罰せられるとわたしたちが言うのは、大言であり、脅しにすぎない。わたしたちは、人々が恐れから徳のある生き方をするように求めている。それが良いことで、喜ばれることだからではない、と。だれもそう言わないように、これに短く答えます。もし、そのような罰がないなら、神は存在しないことになります。あるいは、存在するとしても、人間のことを心にかけておられないことになります。また、徳も悪徳も何もないことになります。そして、先に述べたとおり、立法者たちが、定められた良い掟を破る者に刑罰を加えるのも、不義なことになります。9:2 しかし、立法者たちも、その父も、不義ではありません。父は、ロゴスによって、ご自分と同じことを行うように教えておられます。ですから、彼らに同意する者たちも、不義ではありません。もし、だれかが人間の法がまちまちであることを持ち出して、こう言うとします。ある人々のあいだでは、これは良く、これは恥ずべきことだとされている。ところがほかの人々のあいだでは、前の人々が恥ずべきとすることが良いとされ、良いとすることが恥ずべきとされている、と。そういう人には、これについて言うことも聞いてもらいましょう。9:3 わたしたちは知っています。悪い御使いたちが、自分たちの悪徳に似た法を定めたのです。彼らに似た者となった人間は、その法を喜びます。また、正しい理性は現れて、示しています。すべての考え、すべての教えが良いのではなく、あるものは悪く、あるものは良いのです。ですから、こういう人々に対しても、わたしは同じことや似たことを言うことになります。必要なら、もっと詳しく語ります。しかし今は、本題に戻ります。

10:1 こうして、わたしたちの教えは、人間のどんな教えよりも偉大であることが明らかです。わたしたちのために現れてくださったキリストが、ロゴスの全体となられたからです。からだとも、ロゴスとも、魂ともなられたのです。10:2 実際、哲学をした人々や法を定めた人々は、いつの時代にも立派なことを語り、見いだしてきました。それはすべて、ロゴスの一部によって、見いだし、見つめることを通して、彼らが骨折って得たものです。しかし彼らは、ロゴス、すなわち

キリストにかかわることのすべてを知ったわけではありません。そのため、しばしば自分たちの言葉と食い違うことも言いました。10:3 キリストより前に生まれた人々も、人間としてできるかぎり、理性によって物事を見つめ、吟味しようとしました。そのために、神を敬わない者、余計な詮索をする者として、裁きの場へ引き出されたのです。中でも、このことにだれよりも熱心だったソクラテスは、わたしたちと同じ罪で訴えられました。実際、人々は、ソクラテスが新しい神霊を持ち込み、国が神々と認めているものを認めていないと言ったのです。10:4 しかしソクラテスは、ホメロスやほかの詩人たちを国から追い出しました。そして、邪悪な悪霊たち、詩人たちが語るようなことを行った悪霊たちを退けるように、人々に教えました。また、人々の知らない神を、理性によって探し求め、深く知るようにと勧めました。こう言ったのです。『しかし、万物の父であり造り主であるかたを見いだすのはたやすくなく、見いだしても、それをすべての人に語るのは安全ではない』10:5 これを、わたしたちのキリストは、ご自分の力によって成し遂げられました。実際、ソクラテスに従って、この教えのために死のうとした者は、一人もいませんでした。しかしキリストは、ソクラテスも一部は知っていたかたです。実際、このかたは、すべての人のうちにおられるロゴスであり、昔も今もそうなのです。このかたは、預言者たちを通して、これから起こることを前もってお告げになりました。また、ご自分を通してもお告げになりました。わたしたちと同じ人間となって、このことをお教えになったのです。このキリストに従ったのは、哲学者や学者だけではありません。職人も、まったく無学な人々も、評判も恐れも死も軽んじて従いました。このかたは、言い表せない父の力であって、人間の理性の器ではないからです。

## 訳注

1 古い刊本の多くは、この章を二章のすぐ後に置く。

# 11〜15章　岐路のヘラクレス、死を恐れない人々、ロゴスの種、結びの願い

11:1 生まれてくる人間はだれでも、死ぬことも必ず負っています。もしそうでなければ、わたしたちが殺されることはなかったでしょう。不義な人間たちも悪霊たちも、わたしたちより強くはなかったでしょう。そのため、わたしたちはその負い目を返しながら、感謝しているのです。11:2 とはいえ、クセノフォンのあの話も、今ここで語るのが良く、時にかなっていると、わたしたちは考えます。クレスケンスと、彼と同じように愚かな人々に向けてです。クセノフォンはこう語りました。ヘラクレスがある三叉路へ歩いて行くと、徳と悪徳とが女の姿で現れたのに出会った、と。11:3 悪徳は、柔らかな衣をまとい、恋を誘うように装って、そのために華やいで見える顔をしていました。ひと目見ただけで、人を惑わす姿でした。悪徳はヘラクレスに言いました。もし自分についてくるなら、いつも楽しく暮らせるようにしてあげよう。自分の身を飾るのと同じ、この上なくきらびやかな飾りで、飾ってあげよう、と。11:4 一方、徳は、顔も身なりもやつれていましたが、こう言いました。「でも、もしわたしの言うことを聞くなら、移ろい滅びる飾りや美しさではなく、永遠の美しい飾りで身を飾るでしょう」11:5 わたしたちは確信しています。美しく見えるものを避け、厳しく理に合わないと思われているものを追い求める人は、だれでも幸福を受けるのです。実際、悪徳は、徳に備わっているもの、ほんとうに美しいものを、自分の行いを隠す覆いとしてまといます。滅びないものを模倣して、まとうのです（実際、悪徳は、滅びないものを何一つ持たず、作り出すこともできません）。こうして悪徳は、地を這うような人々を奴隷にします。自分に備わっている悪いものを、徳にかぶせてしまうのです。11:6 しかし、徳に備わっている、ほんとうに美しいものを悟った人々は、徳によって滅びない者です。分別のある人はみな、このことを見きわめなければなりません。キリスト者についても、競技に励む人々についても、そうです。詩人たちが、神々と思われているものについて語ったようなことを行った人々についても、同じです。わたしたちが、だれもが避けたがる死さえ軽んじていることから、そう推し量るのです。

12:1 実際、わたし自身も、プラトンの教えを喜んでいたころ、キリスト者が中傷されるのを聞きました。しかし、彼らが死も、ほかの恐ろしいと思われているすべてのものも恐れないのを見て、悟ったのです。彼らが悪徳と快楽への愛のうちに生きていることはありえない、と。12:2 実際、快楽を愛する者や、自分を抑えられない者、人の肉を食らうことを良いと考える者がいるとします。そういう者のだれが、死を喜んで迎えることができるでしょうか。そうすれば、自分にとって良いものを失ってしまうのです。そういう者なら、むしろ何としても、この世の暮らしをいつまでも続け、役人たちの目を逃れようとするのではないでしょうか。まして、殺されるために自分から名乗り出たりはしないでしょう。12:3 邪悪な悪霊たちは、ある悪い人々を通して、次のようなこともすでに行わせました。実際、その人々は、わたしたちに向けた中傷によって、ある人々を殺しました。そのうえ、わたしたちの仲間の召使いや、子供や、女たちを拷問へ引き立てました。そして恐ろしい責め苦によって、言い伝えられている作り話を、わたしたちのこととして無理やり言わせるのです。それは、彼ら自身が公然と行っていることです。わたしたちには、そのどれ一つ当てはまらないので、気にかけません。生まれることのない、言い表せない神を、わたしたちの考えと行いの証人としているからです。12:4 実際、もし当てはまるなら、なぜわたしたちは、これらのことも良いことだと公に言い表し、神の哲学だと示さないのでしょうか。わたしたちは、人を殺すことでクロノスの秘儀を行っているのだ、と言えばよいはずです。また、人々の言うように血をたらふく飲むのは、あなたがたが誉れをささげている偶像と同じことをしているのだ、と。その偶像には、理性のない動物の血だけでなく、人間の血も注がれます。あなたがたのうちで最も名高く、最も高貴な人が、殺された者たちの血を注ぐのです。また、男が男と交わり、女た

ちとはばかりなく交わるのは、ゼウスやほかの神々に倣う者となったのだ、と言えばよいはずです。エピクロスの書物と詩人たちの書物を、弁明に持ち出せばよいのです。12:5 しかしわたしたちは、こうした教えを避けるように、人々に説いています。それを行った者たちや、それに倣う者たちも避けるように説いています。今もこの言葉によって、そう説こうと戦ってきたとおりです。そのためにわたしたちは、さまざまな仕方で攻撃されています。しかし、気にかけません。神が、すべてを見ておられる正しいかたであることを、知っているからです。12:6 今もだれかが、高い壇に登って、悲劇の声で叫んでくれたらよいのに、と思います。「恥じよ、恥じよ。自分たちが公然と行っていることを、罪のない人々になすりつけるのを。自分たちにも、自分たちの神々にも備わっているものを、それと少しもかかわりのない人々にかぶせるのを。改めよ、戒めを受けよ」

13:1 実際、わたしも知りました。邪悪な悪霊たちが、ほかの人々を遠ざけるために、キリスト者の神の教えに悪い覆いをかぶせていたのです。それでわたしは、そうした偽りを言う者たちも、その覆いも、大勢の人々のもとでの評判も、あざ笑いました。13:2 わたしは告白します。わたしは、キリスト者として見いだされることを祈り、そのために力の限り戦っています。それは、プラトンの教えがキリストの教えとかけ離れているからではなく、すっかり同じというわけではないからです。ほかの人々、つまりストア派の人々や詩人たちや著作家たちの教えが、すっかり同じではないのと同様です。13:3 実際、彼らはそれぞれ、種としての神のロゴスの一部によって、それと同じ性質のものを見て、立派なことを語りました。しかし、より大切な事柄で、自分たちの言葉と食い違うことを言った人々もいます。その人々は、揺るがない知識も、くつがえされることのない認識も、持っていなかったことが明らかです。13:4 ですから、すべての人のもとで立派に語られたことは、どれもわたしたちキリスト者のものです。実際、わたしたちは、生まれることのない、言い表せない神から出たロゴスを、神に次いで拝み、愛しています。このロゴスは、わたしたちのために人となられたからです。わたしたちの苦しみをともに受ける者となって、いやしをもたらしてくださるためでした。13:5 実際、著作家たちはみな、ほんとうにあるものを、おぼろげに見ることができました。自分のうちに生まれつき植えられたロゴスの種によってです。実際、あるものの種や、力に応じて与えられたその模倣と、そのもの自体とは、別のものです。そのもの自体にあずかることも、それを模倣することも、そこから出る恵みによって起こるのです。

14:1 ですから、あなたがたにも求めます。あなたがたの判断を書き添えて、この小さな書を公にしてほしいのです。そうすれば、ほかの人々にもわたしたちのことが知られます。そして、その人々が、偽りの思い込みと、良いことを知らない無知から、解き放たれることができます。この人々は、自分の罪のために刑罰を受けるべき者となっているのです。人間の本性には、良いことと恥ずべきことを見分ける力があるからです。また、彼らはわたしたちを罪に定めているからです。わたしたちが、彼らの言うような恥ずべきことを行っているとは、知りもしないのにです。また、そのようなことを行い、今もなお人間に同じことを求める神々を、彼らは喜んでいるからです。彼らは、わたしたちがそうしたことを行っているかのように、死や鎖やそのほかの罰を科します。そのため、まさにそのことによって、彼らは自分で自分を罪に定めているのです。ほかの裁き手は要らないほどです。

15:1 ［わたしは、わたしの民の中にある、神を敬わない、人を惑わすシモン派の教えも軽んじました[1]。］あなたがたがこれを公にするなら、わたしたちはこれをすべての人に明らかにしたいと思います。人々が、できることなら考えを改めるためです。ただこのためだけに、わたしたちはこの言葉を書きまとめたのです。15:2 わたしたちの教えは、健全な判断に照らせば恥ずべきものではなく、人間のどんな哲学よりもまさっています。仮にそうでないとしても、少なくとも、ソタデスやフィライニスやアルケストラトスやエピクロスの教えとは似ていません。そのほかの、同じような詩人たちの教えとも似ていません。そうした教えは、語られるものも書かれたものも、だれもが触れることを許されているのです。15:3 これで、わたしたちは筆を置きます。わたしたちにできるかぎりのことは行いました。そのうえで、あらゆる所のすべての人が真理にふさわしい者とされるように、祈りました。ですから、どうか、あなたがたも、敬虔と哲学にふさわしく、自分自身のために正しい判断を下しますように。

## 訳注

1 この一文は前後とつながらず、後の時代の書き込みとみられる。

**第二弁明**

2026年11月23日版
著者　ユスティノス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/justin-second-apology/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/justin-second-apology
全文を、ギリシア語原文（Ἀπολογιά δευτέρα）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。